

大学生の愛着パターンと環境移行期の適応過程について

松田 菊佳

(久保ゼミ)

問題

愛着理論

養育者と子の関係は、人生において初めて築かれる関係であり、その後も一生続いていく何よりも強固な関係と考えてもいい。Bowlby (1973) は、愛着 (Attachment) とは子が安全欲求のために養育者との近接性を維持したり、回復したりしようとする強い傾性であるとしている。Bowlby は、幼児期に養育者と子の間に安定した愛着形成ができていれば、危機が生じた際に安全基地として信頼関係を作りあげていくことができると述べている。反対に、愛着形成が不十分なものであれば、子は強い分離不安に襲われ、養育者は安全基地としての機能を十分に果たせないとしている。このことから、幼児期における愛着の質が青年期やその後の対人関係に大きな影響を与えると考えられるのである。

また、Bowlby (1969) は、愛着の発達には4つの段階があると考えている。第1、第2、第3段階まで子は養育者に対して強い愛着行動をとり、第4段階からは次第に愛着行動は弱まっていく。4歳の頃になると、養育者と離れて一人での行動が増えていくが、その後の愛着行動が全くなくなるわけではない。Bowlby が「人は大人になっても愛着行動を行う」と述べているように、人は幼児期でなくとも、安全欲求のために何かしらの愛着行動がみられるのである。

成人の愛着研究

幼児期においては行動レベルで愛着行動が観察されるが、成人においては乳幼児のように顕在性の高い愛着行動をとることは極めて稀である。そのため、成人の愛着スタイルや様式を行動レベルで観察し測定することは、非常に困難といえる。そこで、成人の愛着研究では、自己報告型の尺度

法やインタビュー法を用いることによって、個人の内在化された心的表象が測定されてきた。

成人の愛着研究において内的作業モデル (= 心的表象) という概念は、愛着の安定性や継続性を保証するための非常に重要な役割を担っている (金政, 2003)。その内的作業モデルという概念は、Craik (1943) によって作られ、Bowlby (1973) によって愛着に特化した形で再構成されたものである。内的作業モデルとは、(1) 自分は愛され手助けしてもらえる価値ある存在であるという自己に関する主観的確信と、(2) 他者や外的世界は自分の求めに応じてくれるという他者に関する主観的確信からなる、2つの表象モデルで構成されている。こうした考えに基づいて、Bowlby (1973) は成人の愛着行動を、自己に関する作業モデルと他者に関する作業モデルの2要因からなるとしているのである。

成人の愛着研究では数多くの愛着スタイル尺度が生まれ出されてきた (Brennan et al, 1998)。まず、幼児に母親および見知らぬ人との分離と再会を経験させ、その場面に対する子どもの反応を観察して分類する SSP (Strange Situation Procedure) 法 (Ainsworth, et al, 1978) による3つの愛着分類があげられる。すなわち、安定型 (secure; B type)、回避型 (avoidant; A type)、アンビバレント型 (ambivalent; C type) と名付けられた3分類である。その後、Main & Solomon (1989) は、D type として無秩序型 (disorganized) を追加した。その後、Bartholomew (1990) によって4分類へと確定され、現在では愛着スタイルの概念化・測定方法が4分類に集約されつつある。そして、これら4分類の特徴は、愛着スタイルを規定する「親密性の回避 (Avoidance)」（以下、「回避」と略す）と「見捨てられ不安 (Anxiety)」（以下、「不安」と略す）の2因子に集約されることが明らかとなっている (Brennan, et al, 1998)。中尾・加藤 (2006)

は、これらの4分類と2因子の関連を以下のようにまとめている。

- (1) 安定型 (Secure) : 「回避」と「不安」の傾向がともに低いスタイル。
- (2) 拒絶型 (Dismissing) : 「回避」の傾向が高く、「不安」の傾向が低いスタイル。
- (3) とらわれ型 (Preoccupied) : 「回避」の傾向が低く、「不安」の傾向が高いスタイル。
- (4) 恐れ型 (Fearful) : 「回避」と「不安」の傾向がともに高いスタイル。

このような考えは、青年期や成人期においても、「回避」が低いあるいは「不安」が高いほど、愛着行動を示しやすいことが考えられる。

愛着と対人関係不安・孤独感の関係

親への愛着は、自尊心、抑うつ、アイデンティティ、大学への適応、情動制御、友人関係に影響を与えることが示されている(丹波, 2005)。親への愛着から影響を与えられるこれらの要因は、どれもがストレスと関連性があるといえる。例えば、岩永・金井・横山(2011)は、顕在的自尊心の低さは主観的ストレスに結びつき、潜在的自尊心の高さは、生理的ストレスの高さや課題の重要度認知に結びつくと示している。また、抑うつは主にストレスや身体的な状態などが原因で気分が落ち込み、その結果、身体のあちこちに不調があらわれるとされている。また、丹波(2005)は愛着システムが活性化するストレス要因は、個人内要因・環境要因・対人関係要因にまとめている。本研究における環境移行も、ストレス要因としての環境移行に該当し、また対人不安関係と孤独感も愛着システムが活性化するストレス要因に含まれていると考えている。

これらのことから、親への愛着がストレスと関連があるといえる。丹波(2002)は対人関係不安と孤独感では、愛着不安が高い人の方がストレス期に感じる孤独感や対人関係不安と、ストレス低減期に感じる孤独感や対人関係不安との差が大きいことを示した。また、ストレス低減状況でも、愛着不安の高い人の方が孤独感や対人不安関係が高いことが示唆されている。愛着回避が高い人はストレス状況において親から接近や助力を拒否された際の葛藤をなくそうと、接近や助力を回避する。

つまりストレスから注意をそらして感じにくくしている。一方、愛着不安の高い人は、親からの接近や助力に対する不安が高く、それに対して親からの反応が未知数であるため、ストレスに敏感になるということが示されている。

環境移行と適応過程

人生を過ごしていく上で、ある出来事や移動によって環境が変化し、今までの慣れ親しんだ環境から新たな環境へ移り変わることは、およびそこに生じる状態のことを環境移行という(亀岡, 2006)。人は無意識下において、周囲の環境から様々な影響を受けながら活動している。それは、人間の日常生活に直接あるいは間接の影響を与える生活環境(一般的に「環境」の概念として捉えられる)だけではなく、個人を取り巻く他者との関係を含む対人的環境、社会を形作る法や制度などの社会環境なども含んでいる(亀岡, 2006)。そして、これらのような慣れ親しんだ環境から新たな環境へ移り変わることは人生において大きな転機のひとつといえる。例えば、今まで家という環境しか知らなかった幼児が、幼稚園や保育園といった集団生活の中へと身を置く機会や、会社の意向によって転勤を余儀なくされる場合、その他にも、進学や就職、結婚、親しい人の死などといった場合である。そして、人は様々なライフイベントの中で、その時々新たな環境に適応することが求められるのである。

このような、人と環境の相互作用を適応という(八木・篠原, 1989)。本研究において対象とした大学生は、教育制度における学生面と社会で働く青年・若者面といった両面の間に位置する立場だといえる。高等学校までの環境とは一変して、今までの教育制度はもちろんのこと、そこに社会的立ち位置も加わるということは、より高い不安とストレスを感じることになる。なぜなら、対人関係や自我同一性の確立、将来の生活設計などといった、今まで以上に個人の役割を考えなくてはならないからである。そして、高等学校から大学への進学という学校間移行に、どう適応していくかが大切となる。丹波(2006)は、その時起こる物理的、社会文化的な環境の変化や対人環境の変化といった様々な変化に適切に対処できるかどうか、

大学生の愛着パターンと環境移行期の適応過程について

その時だけでなくそれ以後も新環境で適切な生活を送れるか否かを左右すると述べている。そうした新環境での適応のためには、人とのコミュニケーションは必要不可欠なものだといえる。おしゃべりや相談できる友人を作ることが、今後の人生においてよきサポーターとして新環境への適応を支えてくれることだろう。大学生活においても、対人環境の変化に適応していくことが重要なのである。

目 的

高校生から大学生への転機は、社会性はもちろんのこと、個人の心理的变化にも大きな影響を与えている。特に、今まで実家暮らしであった学生が親元を離れ、新たな環境において、ひとりで生活することは、大きなストレスを伴うだろう。そこで、前述のような大きな環境移行に伴い、その地で適応していくことと親への愛着のあり方は大いに関係していると考えられる。

これまでの愛着研究から青年期（や成人期）においても、親への愛着のあり方は社会適応や対人関係に大きな影響を有しており、自身に関する表象を形成する上でも重要な役割を果たしていると言える。

これらのことから本研究では、親への愛着の違いによる大学生の環境移行期での適応過程の差異について、学年差での比較も含めて調査する。

また、本研究では、親への愛着を「不安」と「回避」の2側面からとらえ、親への愛着が環境移行というストレス状況の中で、適応過程へと向かう影響についての検討を行う。なお、環境移行はより環境移行期の適応過程の差異を調べるため、1回生と4回生という学校間移行に注目し、親への愛着が孤独感と対人関係不安に及ぼす影響に焦点をあてて検討する。

先行研究の結果をふまえ、本研究では以下の3つの仮説について検討を行う。

仮説 1 :

愛着不安が高い群は愛着不安が低い群よりも、対人関係不安が高く、孤独感も高い。

前述のように、愛着不安の高い人の方が孤独感や対人関係不安が高いことが明らかにされてい

る。青年期においても、愛着不安が高い人の方が親への愛着行動を示しやすいことから、大学生という立ち位置から、親へと心理的距離を感じ、孤独感と対人関係不安が高くなるのではないかと予想される。

仮説 2 :

愛着回避が高い群は愛着回避が低い群よりも、対人関係不安が高く、孤独感は低い。

愛着回避が高い場合は、他者との間に情緒的な距離をおくことを好むとされている。それにともない、孤独感も低くなると考えられる。「親密性の回避（回避）」が高いほど、他者観はネガティブになってしまうため、対人関係不安は高くなると予想される。

仮説 3 :

親への愛着による1回生と4回生の環境での適応過程の差異は、愛着高群低群問わず、1回生のほうが対人関係不安・孤独感が高くなる。

1回生は高校から大学へと環境移行して日が浅いのに対して、4回生は現在の環境に順応し終えているために、対人関係不安・孤独感は1回生の方が高いと考える。

方 法

被験者 被験者は大学生 109 名に質問紙調査の協力を得て、記入漏れと記入ミスのなかった 103 名（男性 61 名、女性 42 名、平均年齢 19.98 歳）を分析の対象とした。

手続き 協力を得た大学教員をとおして、担当する授業における配布・回収を実施した。また、筆者が個別に配布・回収を行ったものもある。

調査時期 2015 年 11 月上旬～12 月上旬に調査、回収を行った。

調査内容 質問紙は、フェイスシートに学年、年齢、性別を記載させた。本研究では、以下の3つの尺度を使用した。

(1) 親への愛着尺度

Brennan et al. (1998) の尺度を参考にして、丹波 (2005) が「愛着不安」と「愛着回避」からなる親への愛着尺度を独自に作成した尺度を用いた。「親への愛着尺度」の尺度項目は、「愛着不安」が8項目、

「愛着回避」が9項目の計17項目から成り、自分に当てはまると思う程度、5段階評定（1 = 「あてはまらない」、2 = 「ややあてはまらない」、3 = 「どちらともいえない」、4 = 「ややあてはまる」、5 = 「あてはまる」）で回答を求めた。

(2) UCLA 孤独感尺度

工藤・西川（1983）によって作成された尺度を用いた。これは、UCLA 孤独感尺度の20項目を4段階評定（1 = 「けっして感じない」、2 = 「どちらかといえば感じない」、3 = 「どちらかといえば感じる」、4 = 「たびたび感じる」）で回答を求めた。

(3) 対人関係不安尺度

大学新生が抱く不安と悩みの自由記述結果を参考にして、古城（1994）によって作成された「大学生活不安尺度」の「対人関係」カテゴリのみを用いた尺度である。この対人関係尺度の9項目を5段階評定（1 = 「あてはまらない」、2 = 「ややあてはまらない」、3 = 「どちらともいえない」、4 = 「ややあてはまる」、5 = 「あてはまる」）で回答を求めた。

結果

(1) 親への愛着尺度の分析

親への愛着尺度は2下位尺度それぞれ8項目、9項目について信頼分析を行い、 α 係数を算出したところ、愛着不安は $\alpha = .92$ 、愛着回避は $\alpha = .82$ が得られ、高い内部一貫性が確認された。

先行研究では、愛着不安と愛着回避の間に相関がみられたため、本研究でも相関係数を求めた。その結果、愛着不安と愛着回避の間に有意な正の相関（ $r=.20, p<.05$ ）がみられた（表1）。これは、先行研究よりも少し弱いものであった。

次に、親への愛着尺度の2因子それぞれの項目に対する評定値を加算し、散布図を作成した（図1）。図1に示したように、ある程度のまとまりが確認されたため、愛着スタイルの群分けにおいて、クラスター分析を使用した。クラスター分析のWard法を用いて分析を行った結果、次の3クラスターを抽出した。

- 1) 愛着不安と愛着回避ともに低い群を「愛着不安低群・愛着回避低群」（65名）
- 2) 愛着不安が高く、愛着回避が中程度の群を「愛

表1 愛着スタイルの下位尺度合計の相関係数

	愛着不安	愛着回避
愛着不安	1	.20*
愛着回避	.20*	1

* $p<.05$

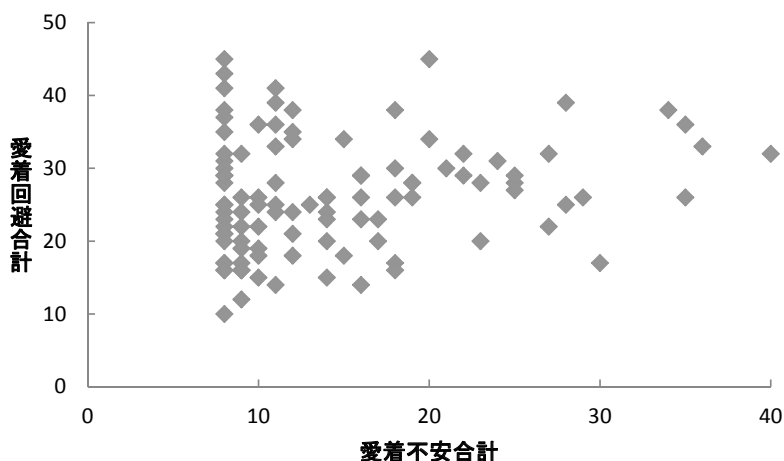


図1 愛着スタイルと尺度合計

大学生の愛着パターンと環境移行期の適応過程について

着不安高群・愛着回避中群」(20名)

- 3) 愛着不安が低く、愛着回避が高い群を「愛着不安低群・愛着回避高群」(18名)

(2) 対人関係不安尺度と UCLA 孤独感尺度の分析

対人関係不安尺度と UCLA 孤独感尺度の各項目に関して、信頼分析を行った。 α 係数を算出したところ、対人関係不安尺度は $\alpha = .94$, UCLA 孤独感尺度は $\alpha = .85$ であった。どちらも高い値が認められたため、データ解析に支障はないと判断した。対人関係不安尺度と UCLA 孤独感尺度の各項目に対する評定値を加算し、それぞれの相関係数を求めたところ、対人関係不安尺度と UCLA 孤独感尺度との間に有意な正の相関 ($r=.30, p<.01$) がみられた (表2)。

(3) 親への愛着スタイルと対人関係不安・孤独感の関連

クラスター分析により抽出された愛着スタイル群を独立変数、対人関係不安と孤独感の尺度得点を従属変数とする、1 要因分散分析 (一元配置分散分析) を行った。その結果、対人関係不安 ($F(2,100) = 4.69, p<.05$) と孤独感 ($F(2,100) = 11.70, p<.001$)

において、愛着スタイルの主効果が認められた。多重比較の結果、愛着不安高群・愛着回避中群が愛着不安低群・愛着回避低群に比べて対人関係不安が高いことが示された ($p<.05$)。また、愛着不安高群・愛着回避中群は愛着不安低群・愛着回避高群に比べても対人関係不安が高いことが示された ($p<.05$)。孤独感においては、愛着不安高群・愛着回避中群が愛着不安低群・愛着回避低群に比べて孤独感が高いことが示された ($p<.001$)。

愛着スタイルと対人関係不安・孤独感のグループ別の分散分析結果の表を作成した (表3)

(4) 親への愛着による学校間環境移行 (1 回生と 4 回生) での適応過程の検討

先行研究より、親への愛着による学校間環境移行 (以降「環境移行」とする) での適応過程の差異を検討するため、分散分析を行った。まず、親への愛着スタイルの愛着不安と愛着回避の 2 側面から、各平均値を算出し、平均値以上を高群、平均値未満を低群とした。そして、対人関係不安・孤独感について、愛着不安 (2) × 愛着回避 (2) × 学年 (2) の 3 要因分散分析を行った (表4)。愛着不安・愛着回避・学年はともに個人間要因である。

表2 対人関係不安と孤独感の尺度得点の相関係数

	対人関係不安	孤独感
対人関係不安	1	.30**
孤独感	.30**	1

** $p<.01$

表3 愛着スタイルのグループ別の分散分析結果

	不安低・回避低	不安高・回避中 平均値 (SD)	不安低・回避高	主効果
対人関係不安	23.42(10.21)	30.60(9.17)	21.89(10.26)	4.69*
孤独感	38.10(7.99)	48.00(9.31)	42.28(7.36)	11.7***

* $p<.05$, ** $p<.01$

表4 対人関係不安と孤独感による学年×愛着不安×愛着回避の3要因分散分析結果

	学年	1回生		4回生		主効果			交互作用			
		愛着不安・愛着回避	低群	高群	低群	高群	①学年	②愛着不安	③愛着回避	①×②	①×③	②×③
対人関係不安	低群		18.36(9.28)	20.15(10.23)	18.67(7.20)	21.67(6.52)	0.00	10.31**	0.23	0.12	0.04	0.15
	高群		29.64(7.26)	29.14(12.38)	0.00(0.00)	28.29(9.25)						
孤独感	低群		39.00(9.43)	39.15(5.22)	31.67(5.23)	46.17(3.34)	0.64	0.82	11.93**	1.91	8.48**	0.96
	高群		41.27(8.57)	46.00(7.37)	0.00(0.00)	45.43(6.72)						

** $p<.01$

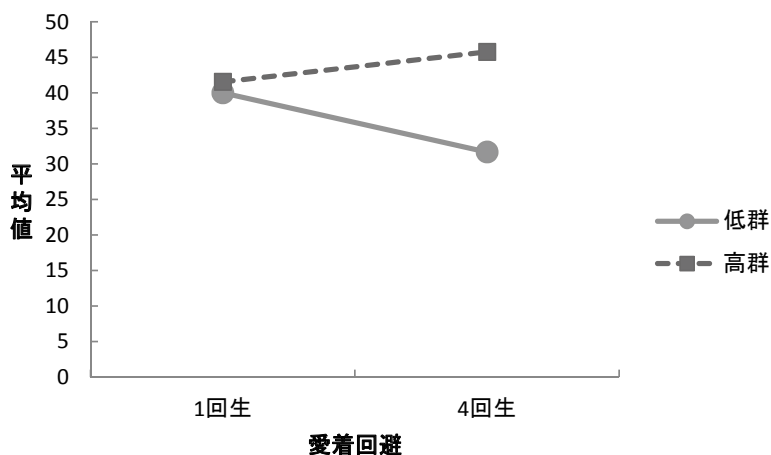


図2 愛着回避低群による1回生と4回生の孤独感の平均値

その結果、対人関係不安において、交互作用は有意ではなかったが、愛着不安に主効果がみられ、愛着不安低群に比べ、愛着不安高群の方が高い傾向であることが示された。孤独感においては、愛着回避×学年の一次の交互作用がみられた($F(1,60) = 8.48, p < .01$)。交互作用が有意であったため、単純主効果を検定した結果、愛着回避高群において、学年の単純主効果($F(1,60) = 1.38, ns$)と1回生において、愛着回避の単純主効果($F(1,60) = 1.10, ns$)は有意ではなかった。愛着回避低群において、学年の単純主効果が有意($F(1,60) = 8.31, p < .01$)、4回生において、愛着回避の単純主効果が有意($F(1,60) = 18.61, p < .05$)のデータが得られた。これらのことから、愛着回避が低い群において、4回生よりも1回生の方が孤独感が高くなることがわかった(図2)。

考 察

まず、今回の愛着スタイルの群分けとしては、「愛着不安低群・愛着回避低群」が65名、「愛着不安高群・愛着回避中群」が20名、「愛着不安低群・愛着回避高群」18名という結果が示された。全体的に見てもわかる通り、「愛着不安低群・愛着回避低群」が最も多かった。現代の大学生は、青年期の4つの愛着タイプのうちの「安定型」が大半を占めていることが明らかとなった。個人的な自律性を失

うことなく、親しい関係を構築し維持できる「安定型」が多くなっているということは、自我同一性の形成がすでに現在進行形で行われているということが考えられる。その背景には、環境の変化に伴う親離れや大学進学率の増加によって、高等学校などでそれを見越した進路指導、自立心の芽生え、個人での環境移行への心構えといった準備段階が行われているからであろうと考える。また、大学入学後に新たな交友関係を構築し、その影響によって愛着不安や愛着回避が緩衝したためではないかとも考えられる。

次に、愛着スタイルの下位尺度である、「愛着不安」と「愛着回避」から弱い正の相関がみられた。また、「対人関係不安」と「孤独感」からも正の相関がみられた。前述のように、愛着は少なからずストレスと関連がある。そして、本研究での対人関係不安・孤独感は愛着システムが活性化するストレス要因の1つといえる(丹波, 2005)。このようにストレスと愛着に関連があるのであれば、愛着とストレス要因である対人不安・孤独感は関連があることが考えられる。これらのことから、どちらの相関もストレスにおける要因が判断の要素の1つになると考えられる。そのため、それが原因となり、一方がストレスを感じることで、もう一方もストレスを感じるという結果になったと考えられる。

また、結果の多重比較により、愛着不安高群・

大学生の愛着パターンと環境移行期の適応過程について

愛着回避中群が愛着不安低群・愛着回避低群に比べて対人関係不安が高く ($p<.05$)、愛着不安高群・愛着回避中群は愛着不安低群・愛着回避高群に比べても対人関係不安が高い ($p<.05$) ことが示された。孤独感においては、愛着不安高群・愛着回避中群が愛着不安低群・愛着回避低群に比べて孤独感が高い ($p<.001$) という結果を得られた。これらにより、仮説1は支持された。丹波 (2002) においても、愛着不安の高い人の方が孤独感や対人不安関係が高いことが示唆されている。愛着不安が高い人にとって、親との距離感は重要なことであり、親からの接近や助力を感じられる場面においては不安が弱まるが、親からそのような行動がみられない場合においては不安が強くなる。愛着不安の高い人はストレスを敏感に察知することから、ストレス要因とされる孤独感と対人関係不安に強く影響しているのではないかと考える。次に、仮説2については、愛着スタイルの中の愛着回避群は低・中・高とあったが、愛着不安高群・愛着回避中群が愛着不安低群・愛着回避低群に比べて対人関係不安が高い ($p<.05$) という結果は仮説2を支持している。しかしながら、愛着不安高群・愛着回避中群は愛着不安低群・愛着回避高群に比べても対人関係不安が高い ($p<.05$) という結果は仮説2を支持しなかった。また孤独感に関しては、回避中群は回避低群より高いが、同時に回避高群よりも高いという結果が得られた。その一方で、愛着回避低群は中群と高群より孤独感が低いという結果も示された。ここで、クラスター分析により3クラスターに分類された愛着群を振り返ってみると、以下のような結果であった。

- 1) 愛着不安と愛着回避ともに低い群を「愛着不安低群・愛着回避低群」
- 2) 愛着不安が高く、愛着回避が中程度の群を「愛着不安高群・愛着回避中群」
- 3) 愛着不安が低く、愛着回避が高い群を「愛着不安低群・愛着回避高群」

このことから、より孤独感が高いと示された愛着回避中群は、愛着不安高群との組み合わせだけだった。つまり、愛着回避より愛着不安が強く対人関係不安や孤独感作用したことが考えられる。丹波 (2005) においても、愛着回避の高い人は親との距離感は関係なく、自分から親へ接触して、拒

否された場合の葛藤をなくそうとするために、ストレスに対して注意を向けないようにしていることが、ストレスを感じにくくさせているとされている。従って、ストレスを敏感に感じる愛着不安よりもストレスを感じにくい愛着回避は、対人関係不安や孤独感にあまり作用しなかったのではないかと考えられる。

親への愛着による学校間環境移行 (1回生と4回生) での適応過程の結果から、対人関係不安に関しては交互作用に統計的に有意な差は見られなかったが、対人関係不安に対して主効果が確認され、愛着不安低群より愛着不安高群の方が高いということが明らかになった。森下・三原 (2015) においても、母親との愛着関係があれば「人への恐怖心」は緩和されると示されている。愛着不安高群は、親からの接近や助力に対する不安がより高く、親からの反応に過敏に反応する傾向があるために、対人関係不安に対して、愛着不安低群より愛着不安高群の方が高くなったと考えられる。次に、孤独感において愛着回避×学年の一次の交互作用がみられた ($F(1,60) = 8.48, p<.01$)。そして単純主効果の検定を行った結果、愛着回避が低い群において、4回生よりも1回生の方が孤独感が高くなることがわかった。しかし、図2を見てわかるように、愛着回避高群においては、1回生より4回生の方が孤独感が高いことが示されている。このことから、仮説3はほぼ支持されなかったといえる。愛着回避低群は、親に対して必要な時に親からの受容や助力を得られる人たちであり、他者観はポジティブな感情を経験しやすく、親密な関係を受け入れやすいという環境下にある。その環境下の中で4回生より1回生の方が孤独感が高いということは、新たな環境下に適応しようという意思はあるのだが、実際に親しくするという状況まで踏み出せずにいることが考えられる。さらに、周りは友人関係を構築しているが、本人は親密な関係性を構築できていないのではないかとという孤独感や、高校までは決められた時間制や学習進度の中で生活してきたが、大学では自主的に学習進度を把握し、何事も自らの責任で生活しなければならないという孤独感が生じたことにより、1回生の方が愛着低群において孤独感が高くなったのではないかと考えられる。一方、4回生は1回生の時

に比べると、友人関係がある程度特定化されてきている傾向にあるために孤独感が低いと考える。1回生は前述の愛着回避低群の環境下の中では多くの友人関係を構築していると思われるが、学年が上がるにつれて、自分と波長の合ったまたは特に関わりが多い友人と関係を深めていき、それまで構築した他の友人関係は希薄化することで、次第に自身が特定した友人と親密な関係を築いていくのではないかと考えられる。例えば、学部内という広い範囲の環境での行動が、次第にゼミ内という狭まった範囲の環境での行動に移行していくのである。このことから、1回生に比べて4回生はある程度の親密な友人関係を築いていることから、孤独感が低くなると考えられる。本研究では、親への愛着による学年での環境移行に対人関係不安・孤独感が関連しているのではないかと考えて、環境移行期を学年間移行に焦点を当てて調査を行い、特に学年差のある1回生と4回生を特定して検証を行った。その結果から、愛着回避が低い群においては4回生よりも1回生の方が孤独感が高くなることが判明したが、愛着不安においては学年との交互作用が示されなかった。今回、大学生に調査を行った時期が11月上旬から12月上旬であり、1回生においては、入学してから月日を経て、ある程度の友人関係や自律性が芽生えていたのではないかと考える。それに伴い、親への愛着も入学当初に比べて薄れてきたために、大きな差異は見受けられなかったのではないかといえる。

最後に、子と養育者の愛着関係はその子の発達過程において、様々なパーソナリティや対人関係、社会的・感情的能力に重要な影響を与えている(Bowlby, 1973)。それが、人にとっての第一次の人格形成であり、その後の親から受ける愛情や生活環境、対人的環境、社会環境などの様々な環境移行を行い、自身の人格を確立していくのである。そのため、親との愛着関係に滞りが生じることはあまり好ましくないといえる。近年では親の子どもへの虐待数や親の離婚率が上昇傾向にある。このことから、現在の親に対する愛着パターンが変化しているのではないかと考えられる。今回、大学生の親への愛着パターンと学年に着目した環境移行期の適応過程について、対人関係不安と孤独感との関連性の検証を行った。しかし、環境移行

期の適応過程について十分な結果を得ることができなかった。そして、一部収集したデータが不十分な点があったことも否めない。今後の課題として、個人間要因であった学年を個人内要因とすること、さらにより詳細な適応過程の結果を得るために、自尊心・抑うつ・アイデンティティ・情動制御などの愛着と関連性のある要因を加え、愛着パターンにおける環境期の適応過程について検討する必要があると考える。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、丁寧かつ熱心なご指導を頂きました京都学園大学人間文化学部心理学科久保克彦教授、行廣隆次准教授、ならびに調査にご協力いただいた京都学園大学の先生方、学生の皆様に心より御礼申し上げます。

文 献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. S., & Waters, E., & Wall, S. 1978 Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Bartholomew, K. 1990 Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- Bowlby, J. 1973 Attachment and loss. Vol. 2: Separation: Anxiety and anger. New York: Basic Books. (黒出実郎ほか訳 1977 母と関係の理論II: 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1969/1982 Attachment and loss. (Vol. 1, 2nd ed.) . New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment Theory and Close Relationships* (pp.46-76) . New York: Guilford Press.
- Craik, K. 1943 The nature of explanation. Cambridge: Cambridge University Press.
- Main, M. & Solomon, J. 1989 Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented

大学生の愛着パターンと環境移行期の適応過程について

- during the Ainsworth strange situation. In M. Greenberg, D. Cicchetti, & M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years*. Chicago: University of Chicago Press.
- 岩永 誠・金井 嘉宏・横山 博司 2011 潜在的・顕在的自尊心の不一致がストレス反応に及ぼす影響 日心第75回大会, 929
- 加藤 和生 1998 Bartholomewらの4分類愛着スタイル尺度(RQ)の日本語版の作成 認知体験過程研究, 7, 41-50.
- 亀岡 聖朗 2006 新大学への環境移行に関する心理的研究—環境認知と愛着感の大学への適応と関連から— 桐生短期大学紀要, (17), 151-158
- 金政 祐司 2003 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望: 現在、成人愛着スタイル研究が内包する問題とは 対人社会心理学研究, (3), 73-84
- 古城和子 1994 大学新生が抱く不安と悩みの実態分析 九州女子大学紀要, 29, 137 - 152
- 酒井 厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み 性格心理学研究, 第9巻(2), 59-70
- 鈴木 伸哉・五十嵐 祐・吉田 俊和 2015 愛着スタイルとしての関係不安と過剰適応反応が恋愛関係における親和不満感情に及ぼす影響 対人社会心理学研究, 15, 63-69
- 丹波 智美 2002 青年期における親への愛着と適応過程—環境移行期に着目して— 平成13年度 心理発達科学専攻修士学位論文概要, 328-329
- 丹波 智美 2005 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究 13 (2), 156-169
- 中尾 達馬・加藤 和生 2006 4つの成人愛着スタイルにおける愛着対象・手段・方略間での愛着行動の一貫性と安全欲求の検討 九州大学心理学研究, 第7巻, 9-19
- 畑中 知佳 2013 青年期における愛着スタイルとストレスコーピングとの関連 2013年度京都学園大学人間文化学部学生論文集, 第12号, 43-57
- 森下 正康・三原 まどか 2013 親しい人との愛着関係が対人不安に与える影響—内的作業モデルと自己受容を媒介として— 発達教育学研究, 31-42
- 八木 晃・篠原 彰一 1989 適応行動について 末永俊郎・金城辰夫・平野俊二・篠原彰一(編) 適応行動の基礎過程: 学習心理学の諸問題培風館, 1-9

大学生の意識調査

この冊子は、表紙を合わせて合計 6 ページで構成されています。質問紙に落丁・乱丁がありましたら申し出てください。

これから、いくつかの質問に答えていただきます。この調査は、大学生の意識に関する簡単なアンケートとなっておりますので、あまり考えすぎずに気楽に回答するようにして下さい。

回答の際は読み落としや回答漏れが無いようによく注意して下さい。

なお、この調査は、あなたの知能や性格などを個別的に測定することを目的として行っているものではありません。また、回答は統計的に処理され、あなた一人の回答のみを公表することはありません。

回答いただいた質問紙は、調査者が責任を持って保管し、調査が終わり次第適切に処理いたします。

もしも、回答の最中に精神的な苦痛などを感じられた場合は、回答をやめていただいて構いません。

この質問紙により、個人が特定されることはありませんので、ご協力いただければ幸いです。

学年：() 回生

年齢：() 歳

性別：(男 ・ 女)

大学生の愛着パターンと環境移行期の適応過程について

以下の質問について、あなた自身がどの程度あてはまるかを1から5の数字のいずれか1つに○をつけてください。

質問は全部で1から17まであります。すべての質問にお答えください。

【選択肢】

1. あてはまらない
2. ややあてはまらない
3. どちらともいえない
4. ややあてはまる
5. あてはまる

1. 必要な時に親は私の近くにいてくれないのではないかと不安に思う。..... 1 2 3 4 5
2. 親は私と一緒にいたくないのではないかと不安になる。..... 1 2 3 4 5
3. 親に見放されるのではないかと不安になる。..... 1 2 3 4 5
4. 私が親の近くにいたがる時、
親はうっとうしく思っているのではないかと不安になる。..... 1 2 3 4 5
5. 私が親に頼ることを、
親は迷惑に思っているのではないかと不安になる。..... 1 2 3 4 5
6. 親は本当は私を理解してくれていないのではないかと不安になる。..... 1 2 3 4 5
7. 親は私にあまり関心がないのではないかと不安になる。..... 1 2 3 4 5
8. 親は困った時に私を助けてくれるか不安に思う。..... 1 2 3 4 5
9. 困ったことがあっても、親に相談したくない。..... 1 2 3 4 5

【選択肢】

1. あてはまらない
2. ややあてはまらない
3. どちらともいえない
4. ややあてはまる
5. あてはまる

10. 親に助言や助けを求めない。..... 1 2 3 4 5
11. 親に自分のことを必要以上に話すのを好まない。..... 1 2 3 4 5
12. 親に助けしてもらわず、自力でやることを好む。..... 1 2 3 4 5
13. 私は親から愛されているという安心感を必要としている。..... 1 2 3 4 5
14. 親がいなくなったときのことを考えると不安になる。..... 1 2 3 4 5
15. 気軽に親に頼ることができる。..... 1 2 3 4 5
16. 親に個人的な感情や考えを打ち明ける。..... 1 2 3 4 5
17. 親と一緒にいると安心する。..... 1 2 3 4 5

大学生の愛着パターンと環境移行期の適応過程について

以下の質問について、あなた自身がどの程度あてはまるかを1から5の数字のいずれか1つに○をつけてください。

質問は全部で1から9まであります。すべての質問にお答えください。

【選択肢】

1. あてはまらない
2. ややあてはまらない
3. どちらともいえない
4. ややあてはまる
5. あてはまる

1. 信頼できる友人が見つかるかどうか不安だ。..... 1 2 3 4 5
2. 本当の友人ができるか不安だ。..... 1 2 3 4 5
3. 自分と気のあう友人ができるか不安だ。..... 1 2 3 4 5
4. 同級生とうまくやっていけるかどうか不安だ。..... 1 2 3 4 5
5. 周りの人とうちとけられるか不安だ。..... 1 2 3 4 5
6. 同級生の考え方についていけるかどうか不安だ。..... 1 2 3 4 5
7. 先輩とうまくつきあっていけるかどうか不安だ。..... 1 2 3 4 5
8. サークルや部活の人たちとうまくつきあっていけるかどうか不安だ。..... 1 2 3 4 5
9. 大学になじめるか不安だ。..... 1 2 3 4 5

1 から 20 までの文章に述べられているそれぞれのことから、日頃あなたはどれくらい感じていますか。自分にあてはまると思う程度を 1 から 4 の数字のいずれか 1 つに○をつけてください。

【選択肢】

1. けっして感じない
2. どちらかといえば感じない
3. どちらかといえば感じる
4. たびたび感じる

1. 私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている。..... 1 2 3 4

2. 私は、人とのつきあいがいい。..... 1 2 3 4

3. 私には、頼りにできる人がだれもない。..... 1 2 3 4

4. 私は、ひとりぼっちではない。..... 1 2 3 4

5. 私は、親しい仲間達のなかで欠くことのできない存在である。..... 1 2 3 4

6. 私は、自分の周囲の人たちと共通点が多い。..... 1 2 3 4

7. 私は、今、だれとも親しくしていない。..... 1 2 3 4

8. 私の興味や考えは、私の周囲の人たちとはちがう。..... 1 2 3 4

9. 私は、外出好きの人間である。..... 1 2 3 4

10. 私には、親密感の持てる人たちがいる。..... 1 2 3 4

大学生の愛着パターンと環境移行期の適応過程について

【選択肢】

1. 決して感じない
2. どちらかといえば感じない
3. どちらかといえば感じる
4. たびたび感じる

11. 私は、無視されている。..... 1 2 3 4
12. 私の社会的なつながりはうわべだけのものである。..... 1 2 3 4
13. 私をよく知っている人はだれもない。..... 1 2 3 4
14. 私は、他の人たちから孤立している。..... 1 2 3 4
15. 私は、望むときにはいつでも、人とつきあうことができる。..... 1 2 3 4
16. 私には、私を本当に理解してくれる人たちがいる。..... 1 2 3 4
17. 私は、たいへん引っ込み思案なのでみじめである。..... 1 2 3 4
18. 私には、知人はいるが、私と同じ考えの人はいない。..... 1 2 3 4
19. 私には、話しかけることのできる人たちがいる。..... 1 2 3 4
20. 私には、頼りにできる人たちがいる。..... 1 2 3 4